
勇者と魔王のカンケイ

ナカムー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

勇者と魔王のカンケイ

【Nコード】

N9240J

【作者名】

ナカムー

【あらすじ】

平和になった世界で勇者と魔王が出会う。そんな話。

P r o l o g u e (前書き)

はじめまして

P r o l o g u e

「ふふふ、来たか勇者よ」

「ああ！今日ここで貴様を倒す！」

「来るがいい！」

『うおおおっ！』

キン、バアン

かりかりかりかりかり『ドォーン』がりっ、ごしごし、
かりかりかり『チュドーン』がりっ、げしげしげし『ギャバー
ン』がたん、ばしゃー

「……………」

ドォーン、ドォーン

「……………」

ギーン、ギヤーン

「……」

———ぽんっ

……………ぶちっ

「ふははははっ、どうした勇者達よ！私を倒すのではなかったのか？」

「まだまだああああ！はああああ——『うるさああああああい！』えっ？」

ちゅっどおおおおおおおん！！

「そんな、私たちが束になっても勝てなかった魔王がたった一撃で！？」

「だけど今がチャンスだ『お前もうるさああああい』ぎやあああつ！」

「勇者様っ！」

「そこの貴女」

「は、はい！」

「もう私たちは人間領を攻めることを是としません。なので、速やかにお帰り下さい」

「……………え？」

「だから、我々魔王軍は貴女方との和平を望んでいるので今日の所は速やかに、『しずかに』お帰り下さい」

「……『返事は？』はいっ！」

『失礼しましたああああ！』

バタン

『新魔王様の誕生だあああ！！』

わああああああ『うるさああい』ドォーン

「何？新魔王の樹立だと！？」

「はっ、何でも和平を望んでいるとか」

「それは真実か？」

「勇者一行からの情報ですので」

「我々の負け、という事か？」

「犠牲を考えなければあるいは、といった所でしょいか」

「そうか、なら決まりだな。使者を出せ！相手から出来る限りの条件を引き出すぞ！」

『了解です』

「母上、これからどうなるのですか？」

「心配しないで。これからは、もっと平和な世界になっていくから」

「本当ですかっ!？」

「ええ。この話がまとまれば、少なくとも大きな争いは無くなるわ。だからこの話は必ず成功させてみせる」

「母上。母上は凄いです」

「ふふ、ありがとう。でも貴女は私の娘なんだから、必ずもつと凄い事ができるわ」

「はいっ!」

「あ、魔力の震えが収まってきた。戦いが終わったのかな? ……
…何処にいるのかな、お兄ちゃん。また、会えるよね……?」

「父さん。人間と魔族の間で和平条約が成立したみたいだ。未だ境界線上では緊張状態が続いてるみたいだけど、確実に平和に近づいてる。俺も頑張るから、安心してくれよな」

「ま、魔王様っ！何処へ行かれるおつもりで!？」

「適当にどっか遠くよっ！」

「何故ですか!？」

「……………暇？」

「魔王さ『じゃ、後よろしく』魔王様っ！」

P r o l o g u e (後書き)

完結までちよつとずつ頑張ります

01 突然の落下物

条約の締結から10年。それは、当事何も出来なかった子供たちが、今では自ら考え、何かを為す事が出来る、そんな時間だ。

条約締結時に両国の境界線上に作られた記念公園、そこに植えられた苗木は今、青々とした葉をつけ、中心には天まで届けと言わんばかりの樹がそびえ立っている。

しかし、種族間の遺恨といったものは未だ残っている。いや、長年続いた争いの染みが落ちることはないのかもしれない。

それでも、両種族が共に働き、過ごしているのを見ることが出来るようになったのは、大きな進歩だと言えるだろう。

そんな時、また1人新たな勇者が生まれた。

「トーリ・グレイシスそなたに『勇者』の称号を与える」

和平条約が締結した今、勇者という役割は変わりつつある。

かつては、魔王によって脅かされていた世界に平和と秩序を取り戻すために、魔王討伐の旗のもと立ち上がった人間を指していた。

しかし、魔王討伐の必要が無くなった今は、この平和を継続させ、

より良い世界にするための一定の権限を持つ者のことを指す。（いつまた戦争になっても大丈夫なように一定水準以上の戦力を選抜している、という一面もないことはないのだが）

——ようするに、簡単に言うところの『正義の味方』である。（魔族側にはこれと同じような称号として『黒の騎士』というものがあり、勇者はそれに対応して『白の騎士』と呼ばれることがある）

『始まりの街』と呼ばれるライオネット。勇者選定の儀が行われる、その街の後ろに広がる森と、そびえる山々の間に隠れる様にひっそりと建っている家がある。そこは、ライオネットから約半日といった場所でありながら、道の険しさ（複雑さ）のために人が寄り付かない場所である。

そんな場所にある家に住んでいるのが、最新の勇者であるところのトリー・グレイシスである。

馬車が通れる様な道ではないため、送迎を辞退したトリーはのんびりと道を歩いていた。

（……………ん？）

トーリは、何かに気付いた様に立ち止まり、辺りを見回す。

しかし、見回した先に望むものはみつけられず、気のせいだったと家に帰ろうとした時、

「に、あああああつつつ！！！！！！」

（何だ、猫か……………つな訳ないだろう！）

声のした方を見ると、何かが落下してきている。そして、その落下物から、何かしらの魔法が発動されそうになり、そのまま落ちる。

（くそっ、魔力切れかつ！）

トーリは走りながら意識を集中させる。自らの魔力を媒介に世界に呼びかける――望むは『風』。地面からの上昇気流を発生させ、落下速度を落とす。その副産物として生まれた風でトーリは速度を上げる。更に、魔力で身体を『強化』し跳躍――落下物、もとい、女性を地面すれすれで抱き抱え着地。

「セーフ」

女性を見ると、魔力を使いきった為だろう、気を失っている。

キャッチ&リリースという訳にもいかないだろう。まあ、幸いにも家はすぐ近くだ。

トーリは女性を背負い、家を目指すことにした。

家に着いたトーリは背負ってきた女性をベッドに寝かせる。

気を失っている原因は魔力の欠乏であり——まあ、放って置いても勝手に治りはするのだが——処置として必要なのは魔力の補充だ。

だが、ただ魔力を補充してやればいいという訳ではない。人にはそれぞれ、身体に合った魔力というものが存在するのである。それは、大まかに3つある。

1つは、目が黒い、魔法が使えないものが体内に持つ、大気に充滿している透明な魔力。

2つ目は、目が蒼い、魔法が使える人族が、体内で透明な魔力を変換した蒼い魔力。

最後は、目が紅い、魔法が使える魔族が、体内で透明な魔力を変換した紅い魔力。

本当はもう1つあるのだが、それは置いておくことにしよう。

つまり、先ずは本人が3つのうち、どのタイプかを確認する必要がある。

そして、彼女が欲しているのは紅い魔力。

これが、その場で応急処置をしなかった理由の1つである。

次に、魔力の補充だが、これには幾つかの方法が存在する。

一番ポピュラーなのは、市販の魔法薬である。

これがない場合は、同じ魔力を持っている事限定だが、魔力の籠った血を魔法薬の代わりとして飲ませる。魔方阵などを併用し、高密度の魔力を浴びせかける。などの方法がある。

また、これも同種の魔力限定だが、粘膜同士の接触——いわゆる、性交渉などである——というものもあるが、これも置いておく。

戦争の原因の1つは、こういった互いの魔力が相容れないということも有ったのだろう。

とにかく、トーリの目、眼帯をしていない右目の色は蒼。つまり、魔法薬に頼るしかないわけだが、何故か魔法薬を取り出す様子はない。

すると、トーリは左目の眼帯を外し、手を女性に向ける。左目に有るのは紅い目、トーリから紅い魔力が溢れだし、制御されて女性の身体に吸い込まれていく。

これで、応急処置は終わり。しばらくすれば目を覚ますだろう。

（何か腹減ったな）

とりあえず、夕飯を作る事にしよう。

02 目覚め

最初に感じたのは、何か温かい物に包まれる様な感覚。

次に、額にきた冷たい刺激。

そして、何だか良い匂い。

(くう)

「……………お腹すいた」

その呟きに、思いがけない返答があった。――忍び笑いという形で

「っ！」

予想外の事態に一瞬体が強張り、その振動で額に乗っていたタオルが落ちる。

ここは何処だろうか？そもそもなんで――と考えた所で声がかかる。

「悪い、驚かせるつもりはなかったんだけど、第一声がそれだとは思わなくて」

声の主、未だ口元に笑みを張り付けた眼帯の男は続けて、

「それより、痛い所はない？」

そう言われて思い出す。

（落ちて、魔法を——）

そこから記憶がない。つまり、魔力が切れて気を失ったのだろう。
とすると

「あれ？生きてる」

あの高さだ、当然落ちたなら只ではすまない。

「確かに、あれは危なかったかも」

「助けてくれたの？」

「頑張った」

「……どうやって？」

「頑張って？」

そう言う彼が何だか可笑しくて、つい笑ってしまった。

「ふふふっ。……どうしたの？」

「な、何でもない！それより」

何であんなことに、と続けようとして

(くう)

『……………』

「とりあえず飯、食べる？」

「……………(コクツ)」

『いただきます』

「はむっ、……………おいしい」

「口にあって良かった。他人と食べるのは久しぶりだったから、味覚がおかしくなってるんじゃないかって心配だったんだ」

すると、何だか決意の籠った言葉がきた

「もしかしなくても、手作り？」

「……………まあ、一人暮らしだし」

「……………そう」

何故か重くなった空気を祓おうと、食後にデザートを出したら、

信じられないものを見た様な顔をして、何だか『じと』とした目で見られた。

残さず食べてたから不味かった訳じゃないと思うのだが。

——閑話休題

「とりあえず、自己紹介からいこうか。俺の名前は、トーリ・グレ
イシス。今日付けで『勇者』だ」

「私はカティシア・アルトバーン。その……………『旅人』？」

なんだろう、きっと嘘はついてないんだろうけど、とても胡散臭い。

『……………』

「……………まあ、いいか。それで、無謀にも全魔力を使いきったの
転移の理由は？」

「えっと、とりあえず城から方向だけ指定して、ちゃんと落ちても
大丈夫のように魔力を少し温存しつつ思いつきり転移したら、お城
の上に出ちゃって、流石にそこに降りるのは不味いなあって、慌て

て更に転移したら魔力が切れました」

あはは。と笑っているけれど、こちらはそれどころではない。

——さて、今『城』という単語は何回出てきたでしょうか？
そう、2回ですね。では、一般にお城と呼ばれている建物の数は？
はい、2つですね。じゃあ、そのお城の名前は、ライオネット城と？

「……………魔王城？」

「ふえ！？な、何のことかな？」

「えー、魔王城からここまでの距離がだいたい「だから魔王城じゃ」
だから、必要な魔力は「ねえ、無視は良くないと思う」位、ってあ
り得ない量だな。これは魔王「ひうつ」」

『……………』

「そう言えば、アルトバーンって」

「うう、——実は最近魔王としての仕事が面倒になってきて。お見
合いしろ〜とかもう」

「家出かよ——って魔王！？」

今の魔王っていったら、10年近く前に代わったあれだろ。ど
う見積もった所で俺もこいつもまだまだガキだろうに。

「はい。魔王、です」

「えー、本日もご機嫌麗しゅう？」

「むー、そこはかたなくバカにしてるでしょう」

「まあ、そこそこ」

「魔王、なんだよ？」

「そうみたいだな、威厳はあまり感じられないけど。つーか、年齢的に嘘臭いっていうか、でもこんな嘘を吐く理由もない訳で、やっぱりお前は魔王なんだろうよ」

「……………いろいろとね、あつたんだよ」

ふふふ、と乾いた笑みを浮かべているのが印象的だった。

「そう言えば、私が寝てる時に誰か来た？」

「…………それは、さっきから感じていた少しばかりの違和感。」

「いや、誰も来てないけど。どうした？」

「…………魔力切れで倒れた私が、あんなにも早く回復することができたのは、魔力を補充してもらったから。」

「今日、勇者になったって言ってたから。私のせいで迷惑かけてないかって。まあ、今更だけど。それより、荷物まとめてあるけど、

旅するの？魔族領に行く予定、ない？」

——そして、ほんの僅かだけど、魔法を行使した形跡がある。

「まあ、あるけど。何でだ？」

——彼の瞳は蒼で、私は紅。

「命を助けて貰ったお礼をしようって思って。はい」

取り出したのは、白く輝く勇者の証と対になるよう作られた黒く輝くアクセサリ。

「これは？」

「黒騎士の証。簡単に言えば魔族版の勇者の証。これが有れば、旅がしやすくなると思うよ。私は魔王だからね、ちよっと職権濫用気味だけど」

「そうは言っても、俺は魔族じゃないぞ」

「魔王の命を救ったって言えば、誰も文句は言わないよ。それに、紅い魔力……使えるんでしょう？」

——私を治療した紅い魔法の使い手は、おそらく彼しかないのだから

「紅い魔力……使えるんでしょう？」

とっさに眼帯を押さえてしまったのは失敗だった。

「別に、どうこうしようって訳でもないし、言いたくなければ詮索もしないよ。お礼をしたかっただけだから。改めて言うね。助けてくれてありがとうございます」

こんな笑顔を真正面から見てしまったのも失敗だった。

「旅、付いていてもいい？」

——この言葉を断る理由が、どこにも見当たらなくなってしまうのだから。

03 旅立ち

窓から射した光が覚醒を促す。ぼんやりとした頭で目を開くと、

「あれ、なんでこんなところで寝てんだ？」

何故か床で寝ていて、とそこで思い出す。昨日は魔王が空から降ってきたのでベッドを貸したのだった。

——うん。今更ながら、凄い状況だと思う。

まあ、考えても仕方がない。朝食でも、……………ああ、今日から2人分なのか。

「置いておいた食材じゃ少し足りないか」

仕方がない、少し荷を崩すか。

——何がいけなかったかといえば、自分1人だけではないと、ちゃんと理解できていなかったという事だろう。

つまり、着替え中だったのだ。

朝の森に悲鳴と爆発音が響き渡った。

ガツン、ゴスツ、ドツ。

そんな音が家に響き渡る。悪かったのは自分とはいえ、家が壊れなくてよかった。

———現実逃避をし続けるわけにもいかないだろう。これが何の音かと言えば、俺が殴られ続けている音、などではなく。

料理をしているらしい。

「昨日のお礼に、今日は私が作るね」

そう言って台所に入り、食材に包丁を振り落とした。

魔王を倒すべく繰り出した勇者の一撃を彷彿とさせる（見たことではないが）包丁捌きは、未だに収まらない怒りをぶつけているのかとも思ったが、どうやら違うらしい。どう見ても、真剣な顔をしている。———少しひきつっているが。

少しアドバイスを、と思ったら睨まれた。……………大人しく待っているという事なのだろう。

ジュアー、ゴポゴポ、コプン。

炒めているのか、煮込んでいるのか、焼いているのか、痛め付けているのか。フライパンを使っているのは確かだが。

火が強いのだろう。食材が焦げた、というよりは寧ろ燃えている匂いがする。

——音が止まった。

料理は終わったのだろうか？そう思った時、

「……………火力が足りない」

そんな声が聞こえた。

「は？」

そんなはずはない。なにせ自分はそこで10年以上も料理をしているのだから。

嫌な予感がする。だんだんと魔力が集まっているのだ。

「ちょっと待て！」

そんな静止の言葉も虚しく、

「ファイアー！！」

魔法は放たれたのだった。

食材が蒸発しただけですんだのは奇跡と言えるだろう。

「料理の経験はありますか？」

「……………今回は初めてです」

「何故、料理をしようと思ったのですか？」

「……………お礼がしたかったからです」

「何故、料理にしようと思ったのですか？」

「……………昨日のご飯が美味しかったので、女のプライド的なものが」

「それで、プライドはありましたか？」

「……………ありませんでした」

「そうですか」

「……………申し訳ありませんでした」

と、まあこんなやり取りがあつて。

「最初は誰でも失敗するから。少しずつやっていこう」

初めての料理は昼の弁当も兼ねて、大量のサンドイッチになった。

「えー、今から旅に出ます。先ずは情報収集と炉銀稼ぎの為に、ライオネットに向かいます。今から出れば、途中休憩をはさんでも夕方には着けるので頑張っていきましょう」

「おー！」

「では出発……………」

「馬は」

「はい？」

「馬はないんですか？」

「そんな高価なものはありません」

昼になった。

「そろそろ、お昼にしようか」

「わーい」

程好い木陰を見つけたカティは何やら魔法を使い始める。

「何やってんの？」

「虫除けの魔法」

「何それ？」

「えーと、虫が苦手とする類の音を発生させる魔法なんだけど……
……」

そんな話を話ながら休憩をして、ちょうどサンドイッチが半分に
差し掛かった時だった。

ズシン。

森から音が消えた。

ズシン。

何か巨大物が近付いて来る音がする。

ズン、ズン、ズン。

一直線にこっちに向かってきているのは、匂いに反応したのか、
気配に反応したのか、魔法に反応したのか、

———音に反応したのか。

「移動するぞ！」

魔法を解除し、荷物を掴んで立ち上がる。

「あ、待って！まだサンドイッチが———」

バキバキ、グシヤ。

現れたそいつは、俺たちがさっきまでいた木をなぎ倒し、持ちきれなかったサンドイッチを潰した。

そいつは、巨大なサイだった。おそらくはサイが魔物化したものだろうが、どちらにしろこの地域にはいないはずのものだ。

となれば、誰かが連れてきたか、もしくは———

とにかく、こちらは徒歩。逃げ切れるとは思えない。となれば倒すしかない。

「仕方ない、やるぞ」

「……………ない」

「カティ？」

「許さない！よくもサンドイッチを！」

「あー、はいはい」

これは、料理の時と同じで、止められないのだろう。なら、周りに被害が出ないように結界を張るのが俺の役目か。

ジョワツ。

サイが消えた。というか蒸発した。

「さて、逃げるか」

「ふが？」

「食べるの早いよ！？じゃなくて、こんな所でこんな強力な魔法を使えば、城の兵士が派遣される。ややこしくなる前に逃げるぞ！」

「もぐ。うん、わかった。はい、あーん」

「むぐ。はむっ、うん美味しい」

とりあえず、かすかに見えてきた街に向かって走ることにした。

04 始まりの街

始まりの街、ライオネット。

ここは、人間領を統べる王が住む城、ライオネット城がある街であり、勇者が生まれる街でもある。始まりの街、と呼ばれているのはそのため。

ライオネットという名前は、王家の名前だが、同時に勇者の象徴でもある。

街の中心に建っている像こそが、魔王から人間領を取り戻した、伝説の勇者であり、初代国王のアーサー・ライオネットである。

何かありましたら、『あなたの暮らしに安心を』をモットーに。
ライオネット街役場までどうぞ。

そんな看板を素通りして、街に入ろうとしたら門番の人に止められた。

それも当然だろう。空を見上げれば日は既に沈んでいる。夕方ならまだしも、辺りは既に真っ暗だ。

あの後、すれ違う警備兵に見付からないよう移動していたら、こんな時間になってしまったのだ。（素直に事情を説明した方が早かったかもしれない）

といっても、怪しいものじゃないと証明出来ればいいだけなのだが。

「ああ、お疲れ様です。これでいいですか？」

こんな時、問答無用で役立つのが勇者の証だ。

流石、城下町というだけあるだろう。

街には未だに明るい場所が多い。というよりは、今からが本番の店が多いというべきか。

しかし、今は用がない。今一番必要なのは――――

「あつた。ここだ」

宿である。

「いらっしやいま――――あつ、トーリさん！」

そう言って飛び出して来たのは、髪を2つ左右に束ねた女の子。
(多分歳は3〜4くらい下)

「こんばんは、サーヤちゃん。またしばらくお世話になりたいんだけど、大丈夫？」

「大丈夫です。空いてなかったら退かしますし」

「ははは、駄目だよそんな事しちゃ」

「そうですか？残念。じゃあその時は私の家に泊まっていてください。安くしますから」

「じゃあ、そういう時はお願いするよ」

よっしゃ。とガッツポーズをとる女性の目がようやくこちらを向いた。

「えーと、どちら様ですか？」

「カティシアって言って、これから一緒に旅をする事になったんだ。それでこちらがサーヤちゃん。この宿の主で俺の料理のお師匠さん」

トーリの料理スキルの秘密が分かったと同時に、やはり料理が出来ないのはマズイのではないかと少しへこむ。

「師匠だなんて。トーリさん、独学である程度出来てたじゃないですか」

「そんな事ないよ。まだただだけど、ここまでやって来れたのは、

やっぱりサーヤちゃんのおかげだよ」

「そこまで言うなら、素直に受け取っておきます。お部屋は2つで宜しいですか？」

「うん、お願い」

「かしこまりました！」

朝になり、ロビーに集合する。とりあえずは、ギルドに行つて手頃なクエストを探す事にしよう。

「おはようございます、トリーさん。カティさん！」

「おはよう、サーヤちゃん！」

……………夜に何かあったのだろうか？何だかとても仲良くなつてる気がする。

「そう言えば、旅って何を目的とした旅なの？」

ギルドに行く途中、そんな事を聞かれた。

そう言えば、話していなかったか。

「あー、せっかくだから観光しつつ、生き別れの妹、一応義妹を探す旅。かな？おそらくは魔族領にいると思う」

「名前は？」

「アイ。特徴は俺と逆。右目に眼帯してて、左目が黒。髪は白」

「何、妹まで眼帯してんの？っていうか似てないわね」

「だから言ったら、義妹だって」

「だから、妹でしょ？……もしかして義妹？」

「義妹」

2人で『いもうと』と連呼していたら、ギルドに着いた。

「何か、賑わってるな」

といっても、クエストを受けるわけでもない。どちらかと言えば見定めているような感じ。

トリー達が適当な討伐クエを受注しようとカウンターにいくと、

「あれ、兄ちゃん達は祭に出ないのかい？」

「どういう事？」

「なんだ、知らねえのかい？明日は1年に1度のライオネット独立記念祭だよ」

sonde、こいつらがメインイベントの闘技会に参加する面子。いわゆる事前調査ってやつだよ。などと言われて、この雰囲気の様さによろやく納得がいった。

「ふーん。面白そうだね。じゃあ、明日はお祭りでも見て回ろうか？」

「おー！」

「じゃあ、このクエストは無しでいいな？」

「……？」

「何で不思議そうな顔をすんだよ。このクエスト、いくら近場とはいえ、相手が相手だ。最低でも2、3日はかかるだろう」

「そうですか？日帰りで十分だと思いますけど？」

カティもいるし、瞬殺の可能性さえある。

「ははは、言うねえ兄ちゃん。もし出来たら、明日の大会の出場権譲ってやるよ」

「いや、別に「乗ったー！」カティ？」

「いいじゃん、出れば。私、サーヤに教えて来るから。城門で待っててー！」

結果から言えば、妙に張り切ったカティの活躍により、クエストは昼前に終わったのだった。

04 始まりの街（後書き）

本編で抜かした所は外伝で書くかも？

05 武闘大会・予選

ライオネット武闘大会。それはライオネット独立から続く伝統的な大会である。かつては戦力向上、戦士発掘。つまり、魔王討伐の為に。そして今は純粹に、優勝を目指して。

この大陸には4つの大きな大会がある。

もうすぐ始まるであろう、ライオネット城、城下町で行なわれるライオネット武闘大会。

アーサーが、魔王を討伐する際に使ったとされる剣、エクスカリバーを賜った湖の跡地とされる場所付近にある、通称『剣の街』アゾット。そこで行なわれるアゾット剣術大会。

魔王が討伐され、人間による大陸統一のあと一步といった所から、前線を今の国境まで立て直したとされる、魔王軍魔法騎士隊隊長、ランスロット・シードの生まれた都市。通称『魔法都市』カルマ。そこで行なわれるランスロット魔法大会。

魔王城、城下町である、通称『黒の街』アルトバーン。そこで行なわれるアルトバーン騎士大会。

これら、4大会。1年に1度はやるものの、実は不定期である。

これは、運を試すというのものもあるが、基本は情報戦ということだ。

出場可能数は100人。出場権は、大会の開始が近付くと、大会に参加しない関係者に配られる。そしてこれらが推薦やクエストの報酬、小さな大会の優勝景品だったり、様々な形で配られる事になる。もちろん、出場権を獲得した者がそれを再配布というの事も可能だし、ライバルを減らす為に1人で複数の出場権を占有するものもありだ。もっとも、占有出来るだけの實力を持っているものに限って、そういう事をしないものなのだが。

大会は、予選と本選の2つに分けられる。

予選は100人を16グループに分けて、それぞれのグループ上位2人が本選へ。

本選は32人によるトーナメント戦である。

とまあ、運がよかったのだろう。大会に出場する事になった。

予選は祭が始まる前の朝早くから昼前に。

本選は昼から夜に。

まあ、予選と言ってもメインイベントには変わらない。会場には既に多くの人がいた。

「うお、凄い人だな」

「やっぱりメインイベントですからねー」

「サーヤはいいの？宿放っておいて」

「大丈夫ですよー。いつものことですし、トーリさんの晴れ舞台を見逃したら、もう後悔で生きていけません」

「ははは、大袈裟だよ」

「そんな事ないですけどねー」

「そんな事より！ 予選って終わったら後は本選まで自由なのよね？ それならさっさと終わらせて3人でいろいろと廻りましょうよ」

「あっ、それはいいですね！」

期待に満ちた2人分の視線を向けられる。

「……わかったよ。ちょっと疲れるけど、早めに終わらせてみる」

予選のルールは、6ないし7人が同時に戦い、気絶、もしくは場

外で失格。最後まで残った2人が本選へ。というもの。

始めはチームを組んで、強い奴から減らしていくのも、ある程度数が減るまで防御に徹するのも作戦の内だ。

『それでは、予選開始です！』

16グループ全てが同時に開始した。

バン！ 開始の合図と同時に何か大きな音が鳴り、

『おおっと、今の音は何で——どうしたのでしょうか！ 既に1グループの試合が終わっています！』

奇襲。俺が早く試合を終わらせる為にとった方法である。

チームを組むのにも、防御に徹するのにもやはり相手の情報というものが必要不可欠である。つまり、様子を見る必要がある。

俺は、その隙を突く事にした。

開始直後に試合場の中心にダッシュ。そして上方に魔法で火花を飛ばし、相手の気が空に逸れた瞬間、全力で四方八方に衝撃波を飛ばした。

鎧の人には効かなかったみたいだが、残りの4人は1、2メートル後ろ、つまり場外へと吹っ飛ばされた。

試合場に残ったのは、俺と鎧の人の2人。試合終了だ。

「ありがとうございます。おかげで、他のグループの試合を見る事が出来る」

「そうか、それは良かった。俺としては全員飛ばすつもりだったんだけど」

「私に奇襲は効きませんよ」

「そうか、考えておくよ」

「ええ、決勝で会いましょう」

06 魔法

トリーたちが予選を終えた時刻は未だ早朝といっても問題ないのであった。

しかし、予選とはいえ祭のメインイベント。街には大勢とは言わないが、そこそこの活気がある状態だ。恐らく、あと2時間もすれば、辺りは人でいっぱいになるのだろう。

「へえ、こんな時間なのに結構人が多いねえ」

「そうですねー。私もこの時間は初めてです」

「ねえ、オススメの場所ってあったりするの？」

「そうですね。やはり盛り上がるようなものはもう少し後にならないと始まらないですね。それでも楽しめるものは有りますけど、その前に行きたいところがあるんですが、良いですか？」

そう言ってサーヤちゃんが向かったのは、街の外れにある人気のない草むら。

「あれ、ここって……」

「はい、私とトリーさんが初めて出会った場所です」

あれは、終戦からそう時間が経っていない頃だった。

食糧などを買いだめしようとして街に降りてみたら、その日にちょうど武闘大会が開催されると聞き、興味本位で本選を観に行く途中のこと。

街には活気が溢れ、露店や即席の賭け試合など皆が平和をかみしめていた。

——そんな時、どこからか声が聞こえた。

辺りに溢れている声とは違う、それは悲鳴に聞こえた。

周りの人は気にも留めていない。ならばそれは俺の気のせいであろう。しかし、足は自然と街の喧騒と離れた方へと向かって行ったのだ。

大通りからすこし離れると、今までの喧騒が嘘のように静かになった。そしてもう一度、今度ははっきりと悲鳴が聞こえた。

声がした方を見ると、そこには1人の少女が剣を腰に下げた2人の男に草むらへと連れ去られていくところだった。

男達の卑下た顔を見れば、何が目的かは容易に想像がついた。周りに人気はなく、大通りに戻り、助けを求める時間もない。

俺の手元に武器はない。もしあったとしても、正面から2人を相

手にする自信も技量もあの頃の俺にはなかった。

ならば、俺に残された方法は1つ、魔法だ。

しかし、1人ならともかく2人は厳しい。強い魔法では事前に気づかれてしまうし、少女までもを巻き込みかねない。しかし、弱ければ不意を突いたところで1人が限度だろう。だから、2人にそれぞれ魔法を撃ち込み、一気に殲滅する。

時間はない。俺は眼帯に手をかけた。

ボヒュン！ その音と共に1人の頭には氷塊が、もう1人の頭には炎弾が撃ち込まれた。

氷塊の方は当たり所が良かったのだろう、1撃で気絶してくれた。しかしもう片方は少女への余波を考慮したためか、髪を少し焦がす程度にとどまった。

「誰だ！」

その声に応えるように、俺は手に炎を纏わせながら男の前に出て行った。

「おい、さっさとその男を連れて去れ。そいつが倒れた理由が分からないほど馬鹿じゃないだろう？」

「くそっ、憶えてやがれ！」

そうして2人は逃げ出した。子供1人相手に逃げ出さざるを得なかった。なぜなら、男にはこちらの人数が2人に見えただろうから。

少し、魔法について話しておこう。本来、魔法とは戦闘には向いていない。普通は前線に守られつつ、大規模魔法で殲滅。これがセオリーだ。

これは、熟練の魔法使いなら別だが、通常、魔法が1度に1つしか使えない事に起因する。魔法という形に固定されたのなら平気だが、魔法となる前の不定形の魔力というものは同系統の魔力に引き寄せられる。つまり、魔法を同時に2つ使おうとすると、魔法という形になる前に互いに混ざりあってしまうのだ。

だから、魔法使いには隙が多い。隙をなくすために、弱い魔法を連射したところで大した威力にもならない。つまり、2種類の魔法が同時に襲ってきた場合、術者は少なくとも2人いるということだ。

だが、俺には別系統の魔力がある。蒼と紅は水と油のように混ざりあう事はない。つまりはそういう事だ。

「大丈夫？」

「というわけなんです！」

あの時私にはトーリさんが勇者様に見えました。それが今は本当の勇者様に、ああやはりこれは運命なのでしょうか！　なんてサーヤちゃんが恥ずかしい事を言い始めたので、俺は話題を逸らすことにした。

「じゃあ、次はどこに行こうか？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9240j/>

勇者と魔王のカンケイ

2011年10月6日13時12分発行